



《改訂版》

ひらべったいわたしのはなし

ノブセノブヨ

ここから一番遠いところで目を開けたのは誰

目次  
Contents

カーテンのはなし	……	9
父がいなくなったはなし	……	13
遠近法の小人	……	17
レモンとミカン	……	21
やさしいアスファルトのはなし	……	25
シロツメクサのはなし	……	29
夜の小石	……	33
レモンと星	……	37
遠い耳	……	41

U狩り	……	45
誰かの林檎	……	49
静かな部屋	……	53
空気の魚	……	57
電車の森	……	61
辻褃鳥	……	65
ひらべつたいわたしのはなし	……	69
春の川	……	73
球根のはなし	……	77



---

父がいなくなったはなし

---

雨がよく降る夜、帰宅すると父がいなくなっていた。父は仕事以外の時間はいつもリビングにいて夜はいびきをかいて寝ているか、ゆつくりご飯を食べているかのどちらかだった。外出をしているのだろうかと思った。

父の不在に気が付いたのは、咳をする音が聞こえてきたからだ。簡単に夕飯を済ませてリビングでくつろいでいると、すぐその辺りから「コン、コン」という小さな音が聞こえてきた。それはあまりにも聞き覚えがある声で、初めは何も思わなかった。しばらくしてもう一度聞こえてきて、「ああ、また咳をしている」と思った。その瞬間、父はここにいないのだと気がついた。父の咳はその後何回か続いた。確かに父はどこかにいる。でもここにはいないのだった。遠い電波を経て届くラジオのよう

に。  
次の朝、家は父がいなくなった話でもちきりになった。お父さん、消えたよね。で

も声だけ聞こえるね。いったいどうしてそんな遠くまで行ってしまったんだか、と。

それからしばらく経ったある晴れた日、カーテンを開けると草原の匂いがした。ふと父の定位置である窓際の椅子のクッションを持ち上げると、そこにはやわらかな草が生えていた。触るとしつとりとして雨上がりのようだった。二つ三つもぎとると、風もないのにふわりと手のひらから離れて部屋の奥へと飛んで行ってしまった。何回やっても同じだった。その後いくら掃除をしても、飛んで行つた草のはしくれはどこにも見当たらなかった。

寝坊をした朝、冷蔵庫の扉を開けると後ろから「車で送つてあげようか」と声がする。いつの間にか戻ってきていたようだ。一体いつ帰つてきたの、と聞くと「どこにも行かなかつたじゃないか」と言う。でも確かに声は聞こえていたけれど、いなかつたじゃないと言うと「そういうときがあるんだよ、いつかわかるようになるよ」と言った。いつもなら何よ知つたかぶつてと腹を立てるのだが、このときばかりは、そうなんだろうな、とすぐに腑に落ちた。





---

やさしいアスファルトのはなし

---

「もしもし、そこの人」

海からの帰り道、アスファルトが声をかけてきた。

「ちよつとめくつてみてもらえませんか」

足元を見ると少しだけひび割れて、浮き上がっているところがある。手を入れて引き上げてみると、意外なほど軽く持ち上がった。

ベリベリベリ！

ほぼ道の横はば全部が、めくれあがっている。

「じゃあ、そのまま転がしてください」

どうして自分が、とも思ったが他にすることもないし、言う通りにすることにした。それに、ロールケーキみたいになった道路をぐんぐん押して行くのはけっこう楽しかった。

やがて街に入つて行くと、色んな人にじろじろと見られた。車もブルーブーとクラクシオンを鳴らしてくる。でもそのころにはもう「まあいいか」という気持ちになつていたので、あまり気にせずぐんぐん進んだ。

ちよつと私の家の目の前で道路が途切れた。巻いてきたアスファルトはもう、ちよつとした山くらいの大きさになつていた。

「おーい。もうここでいいかな？」

返事はあつたのかなかつたのか、いずれにせよ聞こえなかつた。その日はそのまま家へと帰つて、ぐつぐつと眠つた。

翌朝、様子を見に外へ出た。なにやら陽気なざわめきがあるので地面にかがみ込んでみると、アスファルトが剥がれたところに小さな芽がいつぱい出てきていた。私はアスファルトの気持ち进行うと胸がいつぱいになつて、少しだけ泣いた。

一週間ほどで、海へと続く道はたんぼぼでいつぱいになつた。

「これでいいかい？」

ともう一度聞いてみたが、風の音がするだけだつた。

私はあれから毎日、アスファルトに水をやっている。こんなにくるくる巻きになっちゃったけど、いつかここからまたんぽぽが生えますように。いつか緑いっぱい山になりますように。



---

遠い耳

---

白い浜辺の波打ち際に、郵便局があった。

日暮れ前、待ち合いの長椅子に座っている間、窓の外を見ていた。穏やかな波が黄昏の光にゆつたりと引いては寄せ、見ているうちにだんだんとこちらが揺れているような気分になつてくる。まぶたが重い。

番号が呼ばれ、窓口へ行つた。差し出されるままに用紙に記入していたが、わからないところがあつて局員に質問をした。だが、何を言っているのかまるでわからない。何度も繰り返して言ってくれているのだが、黄昏に引き込まれてしまったかのやうに口の動きが極度にゆつたりとして、言葉のかたちをとつてくれないのだつた。一瞬、自分の耳がおかしくなつたのかと思つたが、外の波音は確かにまだ聞こえてくるやうである。どうしたものかと途方にくれてうつむくと、不意に静かな声が聞こえてきた。

「申し訳ございません。私は何分とても耳が遠いのです。私の愚耳ときたら、いつの頃からか、海の向こうへ行つてしまつたようなのです。それで四六時中、いつも私には波の音が聞こえるのです。それで私の口も波打つて、いつもゆうらりとしてしまうのです。私の耳は、あなたの声が届くところにはないのです」

顔を上げると、局員はもう話し終えた後のようで、口を静かに結んでいた。その目は、私の肩越しに海を見ていた。隣の窓口を見ると、そこにもまた海を見る局員がいた。その隣も、そのまた隣も、そのまたずっと点になって見えなくなつてしまふまで、鏡合わせの世界のように皆遠い目で海を見ていた。

私が目を開けるととき誰かがいつも目を閉じる





ひらべったいわたしのはなし《改訂版》

著者 / ノブセノブヨ

---

2020年1月 初版発行

2024年3月 改訂版発行

装幀・挿絵 ノブセノブヨ

印刷所 OTACLUB

\*

nobuse142857@gmail.com

instagram @nbsnby

---

printed in Japan

(c) 2024 Nobuse Nobuyo